

〈シンポジウム〉

20 周年記念特別シンポジウム「語用論研究の広がり：語用論の関連分野からの提言」

民族音声学の夜明け*

定 延 利 之

京都大学

1. はじめに — 背景的な問題意識

言語の意味や形式はイーミック (Pike 1967) なものと言われる。そしてイーミックなカテゴリは、各人に 1 枚ずつ与えられた同じパイを各人が自分のやり方で何切れかに切り分けるように、各言語に与えられた共通のエティックな資源を、各言語が自身のやり方で切り分けたものだとしばしば考えられる。たとえばイエルムスレウは、次の図 1 と図 2 を挙げて、ことばの意味のイーミック性を論じている。

<i>tra</i> 木、木材	<i>Baum</i> 木	<i>arbre</i> 木
	<i>Holz</i> 木材	<i>bois</i> 木材、森
<i>skou</i> 森	<i>Wald</i> 森	<i>forel</i> 森
[デンマーク語]	[ドイツ語]	[フランス語]

図 1：樹木関連語の意味の切り分け
 (Hjelmslev 1943 訳 p. 66)

<i>gron</i> 緑色	<i>gwyrdd</i>
<i>blaa</i> 青色	<i>glas</i>
<i>graa</i> 灰色	<i>llwyd</i>
<i>brun</i> 茶色	

図 2：色彩語の意味の切り分け
 (Hjelmslev 1943 訳 p. 65)

木や木材、森といった現物はデンマーク語社会・ドイツ語社会・フランス語社会に共通 (図 1)、赤外線と紫外線に挟まれた色彩スペクトルもデンマーク語社会 (左)・ウェールズ語社会 (右) に共通で (図 2)、ただそれらをどのように切り分けるかが言語社会ごとに違っている、それがことばの意味だというのがイエルムスレウの考えである。これは、共

* 民族音声学たち、大工原勇人氏、Donna Erickson 氏、林良子氏、Caroline Menezes 氏、Kerrie Obert 氏、朱春躍氏 (アルファベット順) に感謝したい。本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究 (A)(23242023・15H02605, 定延利之) の成果を含んでいる。

通のパイを各人が自分のやり方で切り分けるような意味観と言ってよいだろう。

このような「パイの切り分け」的な意味観を否定することは、特に現在では困難ではない。盆栽や割り箸は、図1のどこに位置付けられるのか？ また図2は、各々の色彩語が言語社会ごとに固有の意味を持つという事実と（彭2005）、どのように折り合いがつけられるのか？ そもそも、ことばの意味とは、外界の事物ではない。それは各々の言語社会の成員たちが奔放な想像力で開拓し、アリの巣のようにさまざまな方向に広げ、深めていくイメージである。盆栽や割り箸は日本語話者たちが開拓した（そして庭先や料理屋などにしばしば実体化させている）イメージであり、これらのイメージの広がりや深まりは日本語社会にしか無い。また、「高貴な黄色」は中国語話者たちが開拓した（そして皇位の象徴としてきた）イメージであり、このイメージの深まりは中国語社会にしか無い。ことばの意味がこのように無限の奥行（広がりや深まり）を持つ以上、それは共通のパイから切り分けられるものというより、編み出されるものだろう。「デンマーク人は、自分たちが夢想だにしない盆栽を、意味の宇宙から切り取って捨てている」と言うことは、デンマーク人の実態からはかけ離れているだろう。

では、ことばの形式（発話形式）はどうだろうか？ イェルムスレウは形式も意味と同様と考えている（Hjelmslev 1943: 訳 p. 66）。意味の場合と違って、「パイの切り分け」的な形式観、つまり発話形式を人類共通の資源（音声）を切り分けたものとみなす考えは、今日なお堅牢に見える。だが、本当にそうだろうか？ — 本稿は、この「パイの切り分け」的な形式観を批判的に検討する筆者らの新しい試みを紹介するものである。

2. 理念

我々の考えでは、意味と同じように発話形式も、各言語社会に共通のパイ（音声）から切り分けられるものではない。それは、発話という運動の宇宙が事実上無限の奥行を持つからである。身体が共通だからといって、発せられる音声が共通になるわけではない。仮に一つ一つの単純な調音が言語社会間で共通するとしても、それらの調音を組み合わせる方法や、組み合わせのタイミングが無数にある以上、結果として発話形式には無限の奥行が生じる。これを切り分けの産物とすることは、たとえばダンス運動について「デンマーク人は自分たちが夢想だにしない阿波踊りをパイから切り取って捨てている」「ムーンウォークがこの世に生まれる前から、踊りのパイはムーンウォークを含めた形で存在していたが、人々に切り取られ捨てられていた」などと言うことと同様、人間の実態からかけ離れている。我々の考えによれば、発話形式という運動は、個々の言語社会の成員たちが思い思いの方向に開拓し、編み出してきた「振付」である。読者の理解を多少とも助けると思える、しぐさの例を(1)に挙げよう。

- (1) 右の地域の漁業組合に行ったとき、一人の少年が兄貴分にくっついて小舟に乗ろうとしているのを岸壁から見た。兄貴分が舟にとびのるとき、掻き切るような威勢よさで手^て洩^{ばな}をかんだのだが、おかしかったのは、即座に弟分の少年が小鼻に指をあてておなじ所作をしたことだった。私がふきだすと、横にいた漁業組合長さんが、

「あんな真似までしやがるんです」

と、いった。

少年たちは、すぐれた能力をもつ兄貴分につきたがるのである。たまに「沖へつれて行ってやる」といわれると、仔犬のようによここんで舟に乗る。

「あれで、兄貴分を尊敬しているんですよ」

と、組合長さんがいった。そうかもしれなかった。相手に対して尊敬の姿勢をとるとき、相手の持っているものが、水が上から流れるようにして、少年の中に入るのかと思われた。それには、相手のくせまで無意識にまねをしてしまうことになるのかもしれない。

「あの兄貴分の若い人の手洩も、たれかから伝承したものかもしれませんな」

「それは、よしさんという人でした」

よしさんという、老人（だと思ふ）が、兄貴分の少年のころの師匠だったらしい。そういう手洩の系譜をたどれば、よしさん以前にまでさかのぼれるのではないかとおもったりして楽しかった。

（司馬遼太郎 1972 『菜の花の沖（二）』 文春文庫、pp. 423-424、あとがき、傍点は司馬氏）

ここで小説家・司馬遼太郎が（多分の想像を交えて）観察しているのは、掻き切るような威勢よさで手洩をかむ仕草が、少年から少年へと「無意識にまね」つまり非意図的に習得され、受け継がれていく様子である。もちろん、「始祖」が厳密にその形で手洩をかんだのかどうかはわからない。継承の中には微妙な改変の可能性が常にあるだろう。

我々が光を当てようとしているのは、この手洩のかみ方のような、個別社会に息づく発音の「振付」である。人間が発し得る全言語社会共通の音声の宇宙は、音声学者はいざ知らず、個別言語社会の話者たちが意識するものではない。我々が追及する音声とは、個別言語社会の成員たちにとっての「民族音声」である。それは言語社会間で共有されているパイではない。それは個々の言語社会ごとの伝統の中で築かれてきた、さまざまな振付に沿いながら、その振付を改変し、新たな振付を形成していく一回性のダンス・パフォーマンスのようなものである。

民族音声学とは、以上の理念のもと、日常生活にあふれるさまざまな発話を虚心坦懐に見直し、その発話形式と文化的意味とのつながりを解明しようとするものである。この名

称は、ことばの形態統語論的なふるまいとその文化的意味のつながりを解明しようとする「民族統語論」(ethnosyntax, Enfield 2002) にちなんだものである。

3. 方法論

話し手の発話の様子を厳密に実証するには、十分に明るい実験的環境で、実験参加者の身体を固定した上で、これらの話し方がなされる様子を実験参加者の真正面と真横から高速度撮影して観察すると同時に、計測対象を設定し、測定値の量的な比較をおこなう、必要に応じて磁気共鳴画像 MRI により実験参加者の体内の様子を観察するといった手法で調べるべきだろう。筆者らもそのような方法を実践している(朱・定延 2016)。

しかしながら、そのような実験室的手法でこれらの話し方に迫るには、まず、現実の社会状況での発話に目を向け、観察対象となっている話し方に該当しそうな発話の意味を明らかにしておく必要がある。以下、その理由を2点述べる。

第1点。実験室的な環境では、実験参加者たちはどうしても身構えてしまい、ごく限られた「普通」の話し方しかなくなる。発話をよく観察しようとすることは、かえって発話から本来の観察対象を消失させかねない(観察者のパラドクス、Labov 1972)。

第2点。実験参加者に対して「このような方法で発話してください」というような指示を出せば、実験参加者の筋肉制御能力の調査になってしまう。実験参加者には「このようなきもちで話してください」といった指示しかできない。その指示内容は、当該の発話と思えるものを意味論・語用論的に観察して得なければならない。つまり民族音声学は本来的に方法論として、意味論・語用論的观察と実験音声学的調査の協働を要する。

4. これまでの成果

民族音声学はどの音声言語についても展開可能だが、我々は目下、現代日本語社会に着目している。年配話者が上位者に対して恐縮する際の口をとがらせた発話(画像1上)、呆れた人物の物言いを実演する際の口をゆがめた発話(画像1下)、ケーキ屋の売り子の発声法など、卑近な日常音声の実態が明らかになりつつある(定延・林 2016、Sadanobu et al. 2016、定延 近刊)。



画像 1： 口をとがらせた恐縮発話（上）、
呆れた人物の物言いを実演する口をゆがめた発話（下）

5. おわりに

我々の試みは始まったばかりであり、多くの部分がいまだ暗闇の中の手探りの状態にある。だが、個別言語社会の話者たちにとっての音声に寄り添い、発話運動の奥深さを示すという理念は既に定まっている。意味論～語用論的な観察と、音声科学的な調査の協働という学際的な方法論も動かない。「夜明け」と題したのはこの意味である。

参考文献

- Enfield, N.J. 2002. "Ethnosyntax: Introduction." In: N.J. Enfield (ed.) *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*, 3-30. Oxford: Oxford University Press.
- Hjelmslev, L. 1943. *Omkring Sprogteoriens Grundlæggelse*. Copenhagen: Akademisk Forlag.
[ルイ・イエラムスレウ（著）・竹内孝次（1985 訳）『言語理論の確立をめぐって』東京：岩波書店、1985]
- 彭国羅. 2005. 「色彩意味論研究の社会言語学的アプローチ」、『非文字資料研究』7、14-15.
- Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Pike, K. L. 1967. *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. The Hague: Mouton.
- 定延利之. 近刊, 「現代日本語の「ドリフト」イントネーション」、『日本語音声コミュニケーション』7.
- 定延利之・林良子. 2016. 「コミュニケーションからみた「剰余」の声—日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」、『音声研究』20(2)、79-90.
- Sadanobu, T., Zhu, C., Erickson, D., and Obert, K. 2016. Japanese "street seller's voice." The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and the Acoustical Society of Japan, Honolulu, Hawaii.
- 朱春羅・定延利之. 2016. 「調音動態から見た「剰余」の声—日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」、『音声研究』20(2)、91-101.